論文

都市漂流民のナショナリズム——林芙美子と日支事変

野村幸一郎

芙美子の従軍

内閣情報部は昭和一三年八月、蔣介石の戦意を阻喪し日支事変を終結に向かわせるために計画された漢口攻略戦を実施するにあたって、いわゆる「ペン部隊」を組織した。人選に当たって中心的な役割を果たしたのは、当時、文芸家協会会長の地位にあった菊池寛である。陸軍班に参加したのが、久米正雄、尾崎士郎、丹羽文雄、片岡鐵平、林芙美子など、海軍班に参加したのが、菊池寛、佐藤春夫、吉川英治、吉屋信子などであった。林芙美子の『戦線』[1]、『北岸部隊』[2]は、その時の従軍記である。

タイトルにもなっている「北岸部隊」とは、揚子江北岸を進軍し漢口を目指した熊本の第六師団を指している。『北岸部隊』一〇月四日の記事に、「新聞では〇〇〇としか書けないのださうだけれども、此部隊を新聞では揚子江北岸部隊と書いてゐる」と記しているところをみると、正式の名称を記すと軍機に抵触する恐れがあるので、検閲を通過しているはずの部隊の俗称で、芙美子も呼ぶことにしたようである。また、一〇月一七日の記事には「I部隊長の従卒の方が、林女史と共に茶など淹れて食べられたし、とある部隊長の手紙を持って羊羹を一本とゞけて下さつた」と記され、翌一八日には「〇〇本部」を訪れ、「I部隊長」となごやかに会話を交わした様子が記されている。この「I」とは、おそらく第六師団の師団長であった稲葉四郎を指している。陸軍中将の付け届けとして羊羹が届けられ、翌日に出発を控えた慌ただしい師団本部にも自由に出入りできた、というのだから、芙美子に対する軍の気の使いようが想像できるエピソードである。

さて、このようなふたつの従軍記の性格上、まず最初に、芙美子が従軍した際の事実関係を明らかにしておく必要が生じてくる。芙美子の行程と第六師団が漢口に向かって進軍していく行程をつき合わせることで、芙美子が漢口攻略戦のどの場面にどのようなタイミングで遭遇したかを、確認しておかなければならなくなるわけだが、実際、試してみると、いくつかの興味深い事実が浮かび上がってくる。

まずは第六師団の行程から確認してみよう。昭和一三年八月二日、第六師団は黄梅の攻略に成功する。以後、黄梅から漢口に至るまでに、広済・西河駅・蘄水・上巴河・新洲・黄陂の各町を占領していくことになる。広済を攻略したのが九月六日。一〇月一八日に西河駅、二一日に蘄水、二二日に上巴河・二三日に新洲、二四日に黄陂と、国民党軍との戦闘を繰り返しながら進軍を続け（ちなみに、第六師団の先頭の部隊は、太平洋戦争末期、沖縄戦を指揮し、自死することになる牛島満の部隊だった）、漢口に達したのが一〇月二六日である。漢口攻略戦には他にも多くの師団が参加しているが、最初に漢口に達したのが、この第六師団だった。

従軍作家の中で芙美子は漢口一番乗りを果たすが、それも、「自分の故郷の兵隊につきたいと思つた」芙美子が従軍した部隊が、たまたま、結果的に漢口まで最初に達することになる熊本の第六師団だったことによる。芙美子自身、漢口一番乗りについて、「私の予測しなかつた幸福な運命」と、『北岸部隊』のあとがきで、記している。

さて、その芙美子の行程だが、彼女が東京を出発したのが九月一一日。一七日に上海から海軍機で南京に入り、広済で第六師団に合流するのが一〇月一七日である。そして、芙美子も一九日には西河駅に入り、以後、二一日に蘄水、二二日に上巴河、二三日に新洲、へと移動し、漢口に入ったのが一〇月二七日である。第六師団の先頭を行く部隊が町を占領した当日、おそくとも、その翌日には芙美子もまた戦場に足を踏み入れていたことが分かるだろう。一〇月二一の記事にはつぎのようなエピソードが紹介されている。

私は奥の方へ御不浄をみつけに這入つて行つたが、棉の籠の積んである暗い部屋から、銃を持つた支那兵が五人ばかりぞろぞろと私の前へ出て来た。すぐ後から、薪探しに来た連絡員も一寸吃驚してゐる。支那兵の顔や手足は崩れたやうに黒い血だらけになり、私達にぺこぺこ頭をさげて来た。

銃を持っていた、というのだから、「御不浄」を探している内に芙美子が出会った「支那兵」は、もちろん捕虜ではない。逃げ遅れて、日本軍の中に取り残されてしまった国民党軍の兵士である。この出来事に、芙美子は、蘄水から五キロばかり漢口に向かって西進したあたりで遭遇している。先頭を行く牛島支隊が通過してから、おそらくまだ半日も経っていない。後方の安全な場所から戦争を眺めているのではなく、危険を顧みず（「御不浄」を探しに行ったまま、芙美子が死んでしまったとしても、おかしくないはずである）、辺りに国民党軍の兵士がまだ残っていても不思議ではないような時間と場所に身をさらし、芙美子は戦争の現実を目の当たりにしている。「私がどんな風になつても、おそらく母だけは泣いてくれるだらう」（『北岸部隊』一〇月八日）、「このまゝ、日本へ帰れなくなるかも知れない」（同　一〇月二四日）、「『林さん、もしもの事があつたらどうします。』『その時は殺して行つて下さい』私の顔の皮膚が一瞬しびれてゐる」（同　一〇月二二日）、「何故、あの広い戦場で自分は死なゝかつたのだらう」（同　一〇月二七日）などなど、芙美子が死を予感していたことを示す言葉が、『北岸部隊』にはしばしば登場する。これはけっして大げさな表現ではない。芙美子は本当に、死んでもおかしくないようなことを戦場で

やっている。俗な言い方で言えば、『北岸部隊』は文字通り、〈身体を張った〉従軍記である。

〈兵隊賛美〉という問題

さて、『北岸部隊』や『戦線』を一読してみて気がつくのは、戦争に参加する無名の兵士を賛美する言葉が無数にちりばめられていることである。「痩せてはゐるが、岩のやうな精神力で歩いてゐるこの雄々しい兵士の表情を、私は尊く美しいものにおもつた」（『北岸部隊』九月二二日）、「私は戦争の崇高な美しさにうたれた」、「どの兵隊の顔も光輝ある故郷を持つ落ちつきが、若い眉宇にたゞようてゐる」（一〇月二一日）、「さんらんとした兵士の死の純粋さが、私の瞼に涙となつてつきあげてくる」（一〇月二二日）などがそれである。

あるいは、一〇月二三日の記事には、日本軍兵士の美談が紹介されている。道沿いの農家の軒下に若い母親が死んでいる。そのとなりで三歳くらいの子供が泣き疲れ、兵士の行軍をぼんやり見ている。日本軍兵士は「軍隊が去つてしまへばあの子は飢えてしまふ……」と心配し、一人の兵士がキャラメルを渡しにいった、というエピソードである。そして、戦場のさまざまな感動的で美しい光景を眼にした（と述べる）芙美子は、できればこの光景を兵士の子供たちに見せてやりたいと語り（一〇月二四日）、ともに食事をしては「どの兵隊もキリストのやうに髭をはやしてゐる」と記し（一〇月二六日）、漢口占領の時は兵隊に手を振りながら涙を浮かべ「素直に流せる流をうれしい」と感じる。『北岸部隊』は全編、漢口攻略戦に参加した無名の日本軍兵士たちに対する賛美の言葉で埋め尽くされている、と言っても、けっしておおげさではない。

もうひとつの従軍記、『戦線』も同じである。たとえば、その一一信には「切ないほど美しい場面」として、日本軍兵士が国民党軍兵士を斬殺する挿話が紹介されている。「いつそ火焙りにしてやりたいくらゐだ」と興奮する一兵士に向かって、別の日本軍兵士が「日本男子らしく一刀のもとに切り捨てろ、それでなかったら銃殺だ」と諭し、結局、捕虜の国民党軍兵士は「一刀のもとに、何の苦悶もなくさつと逝つて」しまった、というものである。もちろん、芙美子はこのエピソードを、捕虜虐殺といったような非人道的行為を非難するために紹介しているのではない。「こんなことは少しも残虐なことだとは思ひません」と言い切る芙美子にとって、この出来事は、戦死した戦友への激しい思いのなせる業であり、むしろ純粋な兵士の心情を伝えるものである。「世界いづれの戦史をくりひろげても、こんな場面は度々あること」であり、「内容空疎な日支親善はまつぴらごめんだ」とすら、ここで芙美子は語っている。

このような、兵隊賛美一辺倒の芙美子の姿勢をどう理解すればいいのだろうか。太平洋戦争中のイメージをこの時期に投影してしまうと、芙美子の戦争賛美もその中のひとこまのように映ってしまうが、日支事変の段階においては、日本兵の大陸での行動に疑問を呈する発言は意外に多い。昭和一三年三月『中央公論』に発表された石川達三の『生きている兵隊』が、即日発禁になったのは、よく知られた話であ

る。また、芙美子と同じように漢口攻略戦に従軍した瀧井孝作は、『戦場風景』[3]で、「久米氏（筆者注、同じくペン部隊に参加していた久米正雄を指す）は一昨日も昨日もわりに無口で、戦争はやはりキライらしかった」と記している。また、ペン部隊を案内する将校が「前に南京陥落の時には兵隊が乱暴した、あれにはこりごりしていますから」と話していたことも、瀧井は書き留めている。ペン部隊に参加したからといって、戦場の風景を目の当たりにする作家たちが、かならずしも芙美子のように全員が全員、日本軍賛美、兵隊賛美に傾斜していたわけではなかったことを物語る事実である。

また当時、戦記文学の代表選手だった火野葦平は、広東の南支那派遣軍報道部が発行したパンフレットに、「戦友に愬う」という一文を寄せている。ここで火野は、自分は一兵士として戦争に参加した経歴を持つ、だからこそ、兵士を愛するとともに杞憂する、「戦場にあっては、兵隊の名を辱しむる兵隊が若干ある」とまず訴える。火野に言わせれば、平和の時には一市井人であったものが、戦争が始まるや軍隊に入隊してくるわけだから、軍隊にはさまざまな性格をもった人間に満ちている。だから、「直ちに人格的で模範的であるはずがない。美しい軍隊であるはずがない」（このあたりの認識が芙美子と反対である）、しかし戦勝者、あるいは、征服者として、粗暴な振る舞いをするのは慎むべきであり、「残留している支那民衆に対して、幾分不遜と思える態度を持って臨む兵隊を時々見る」、兵士の一人一人が日本であり、歴史である、ということを自覚しなければならない。火野の主張はこのようなものである。[4]派遣軍の報道部がこのような火野の意見を掲載した（おそらく、軍の意向に沿う形で火野が執筆したものと考えられる）ということは、軍の上層部すら、中国の民衆の反感を買うような日本軍兵士の振るまいを問題視していたことになる。

実際、漢口攻略戦を指揮する中支那軍司令部の名で出された命令書、「中支作命第百二十五号」を読むと、町への入城に際しては「統制ヲ加ヘ以テ軍隊ノ乱入ヲ防止スベシ」、「必要ナル兵力以外ノ進入セシメサルヲ要ス」など、軍の上層部が漢口入城にあたって、不祥事が生じないよう細心の注意を払っていたことが分かる。以下、城内の「担当区域ヲ掃討シ次テ直接警備ニ必要ナル部隊ヲ残シ爾余ハ宿営地域ニ転位」すること、「軍隊ノ宿営地域ハ成ルヘク市街内ヲ避ケ郊外」とすることが命令されている。さらに、「各種不法行為特ニ掠奪、放火、強姦等ノ絶無ヲ期スルヲ要ス」、「若夫レ前述ノ非違ヲ敢テスルモノアラハ皇軍ノ名誉ノ為寸毫ノ仮借ナク臨ムニ厳罰ヲ以テナスヘシ」、「既往ノ経験ニ徴スルニ各種非違ハ」「若干日経過シタル後ニ於テ発生ノ機会多カルヘキヲ以テ時日ノ経過ト共ニ監督ヲ緩メサルヲ要ス」と、命令書は続く。[5]ここで言う「既往ノ経験」とはタイミングから言って、明らかに漢口占領のおおよそ一〇ヵ月前に行われた南京占領を指している。

分かりやすく言えば、兵隊が不祥事を起こさないよう、入城は必要最小限の人数にせよ、不祥事を未然に防ぐために兵士の宿舎は城内ではなく郊外にせよ、事件を起こした兵隊は日本の名誉を傷つけたとして、厳罰に処する、南京占領の時は、入城からしばらく経ってから「掠奪、放火、強姦等」の不祥事を兵隊が引き起こしているから、警

戒を緩めるな。命令書はそう言っているわけである。

ここから石川達三や瀧井孝作、久米正雄、火野葦平だけでなく軍の上層部すら日本軍の兵士を、芙美子のように信用していなかったことがわかる。それどころか、兵士による犯罪行為や粗暴な振る舞いから、中国の民衆の反感を買い、利権を持つ欧米列強の非難にさらされることを、中支那軍司令部は極度に恐れている。その兵隊とともに芙美子は漢口に向けて進軍している。そして、同じ兵隊を、芙美子は「私は尊く美しいものにおもつた」と語り、キリストにすら喩え、敵兵の斬殺さえ、同胞愛の現れとして賞賛の言葉を贈るわけである。

戦争協力について

芙美子のいささか極端とも思えるような兵隊賛美の姿勢については、彼女の愛読者でなくとも、その文学史上の高い評価を考えれば、首を傾げないではいられない。実際、芙美子と日支事変をあつかったこれまでの論考においても、彼女の戦争協力をどう理解するかが、議論の中心となってきた観がある。

たとえば、高良留美子は、芙美子の戦争協力をはっきり認めた上で、ここに彼女の階級的上昇志向とでも言うべきものを指摘している。[6] 近年発見された、パリ滞在中の芙美子の日記に登場する「個人主義とのしられても、私は、長い長（ママ）、母と二人でしいたげられて来たのだ、お母さんや！芙美子は空をめがけて、延びてゆきます。ヒクツにならないで下さい」という一九三二年八月二一日の記述[7]に、高良はまず着目する。その上で、「被差別階層からの足抜けのために彼女が支払った代償」が「〈国家〉という彼女にとって未知のモンスターと手を結ぶ方向」だったという推論を、高良は提示している。後に詳しく論じるつもりだが、『放浪記』[8]を一読すれば分かるように、芙美子は知識人であると同時に、日々の糧を得るための方策を必死に考え、実行するような、生活者のたくましい生存原理を根深く内に抱えている。もし生活者の原理に従って考えていたとするならば、芙美子が文名をあげ、さらには生活を安定させるために、戦意高揚に突き進む時代の風潮に寄り添っていったというのも、ありうる話である。巴里日記の一節のみを根拠するだけでは、いささか説得力に欠ける感もあるが、可能性としては、否定しがたいものがある。

一方、比較的、芙美子に対する同情的な立場から分析を試みているのが川本三郎である。川本は日支事変に従軍する芙美子に客観性の放棄、批判精神の欠如があったことは否定しがたいとしながらも、芙美子が兵隊を批判的に描くことができなかったのは、彼女が、庶民の生きる「『兵隊さん、有難う』という」庶民の視点の視点に立った作家だったからだと説明する。「自分の文章が、夫や父、あるいは兄弟を戦場に送り出した多くの女性たちに読まれることを意識していた芙美子」は、そうであるがゆえに兵隊賛美に向かうのであり、それは「彼女なりのモラルなのである」というのが、川本の分析である。[9] たしかに、子供たちに戦場でのお父さんを見せてあげたいと語る下りなどを読むと、川本の指摘も根拠がないとは言えないが、それにしても、銃後の人々の心情をおもんばかった兵隊賛美という説明だけでは、説明

し切れない言葉もまた、芙美子の従軍記には無数にちりばめられている、というのも事実である。

実は芙美子は、漢口攻略戦に従軍する約一〇カ月前、南京を訪れている。日本軍が南京を占領したのが、昭和一三年一二月一三日（入城式は一七日）、芙美子が南京に入ったのが一二月三〇日だから、占領から一七日後に芙美子は南京に入った計算になる。もちろん、参加した部隊はまだ南京市内にとどまっている（市内から撤兵するのは、一月五日である）。芙美子のエッセイ集『私の昆蟲記』[10]には、この時の体験記が収録されているのだが、たとえば、南京市内を歩いている内に喚起された感懐を、芙美子は、「わたしはつくづく批判をするよりもまづ、戦ひには勝たなければいけないと思つた。日本がもしこんなになつたらどんなだらう、考へただけで身震ひがしてならない」、「纏足してひよろひよろ歩いてゐるお婆さんを見ても、敬礼をしてゆく子供を見ても、何だかいゝきびだと云つた気持なのです。小児病的な浅ましいことかも知れないけれども、不思議に惨酷な激しいびし〳〵した気持になつてくるのです」と、書き記している。すくなくとも、芙美子は南京市内を歩く間に「日本がもしこんなになつたらどんなだらう、考へただけで身震ひがしてならない」ような出来事に遭遇している。しかし、彼女は、道義的な立場から批判する、というオプションがあることを承知しながらも、それを選択することはない。彼女が抱いた感懐は、戦争は勝たねばならぬ、というものであった。そのうえ、南京市内で出会った中国の民衆を見ては、「いいきびだ」とすら心の中で呟いている。いずれも、南京市内に日本軍が駐留している最中に芙美子が抱いた感懐である。印象めいた言い方になるが、川本の言うように、かりに芙美子が、銃後の日本国民たちの心情を思いやって兵士たちを賛美しているとしても、日本の兵隊を賛美することと中国の民衆を貶めることは別の次元に属する事柄のはずである。たしかにもう一方で芙美子は、「私はスターリンとか蔣介石は嫌いだけれど、露西亜や支那の民衆は大変好きです」とも記しているが、そうであったとしても、少なくとも『私の昆蟲記』における芙美子の中国民衆に対する姿勢には「ゆれ」のようなものがある、アンビバレンツなものになっていることは、間違いない。

ふたつの対中国認識

ここで従軍記に現れた芙美子の対中国認識について、指摘しておきたい事実がある。先ほど確認したように、『私の昆蟲記』において芙美子は、中国の民衆に対して、敵意をあらわにして、隠すところはなかったわけだが、ここから『北岸部隊』に目を転じると、彼女の対中国認識が大きく様変わりしている事実に気がつく。南京の中国民衆を蔑んでいたはずの芙美子が、一〇カ月あまり経過した漢口攻略戦に従軍した際には、中国の民衆に対して非常に好意的な態度で接しているのだ。

今、私の手元にある『北岸部隊』初版の巻頭には、何枚かのスナップ写真が掲載されている。どの写真も従軍中の芙美子を写したものなのだが、その中に、アマと呼ばれる女性の肩に芙美子が腕を回してい

る写真がある。芙美子は従軍直前、しばらく間、南京を拠点にして戦場を見て回っていたのだが、アマと呼ばれる女性は、南京の宿舎で芙美子に仕えていた召使いである。

『北岸部隊』前半には、アマやその子供、さらには南京の民衆に寄せる好意の言葉が繰り返し登場している。たとえば、九月一九日の記述には、アマから中国語を習う様子が記され、さらに、食材を買うために南京の町に出た時の様子が、「来た日から一人で野菜市場へ買物に行つた。」「私は野鴨（ヤーズ）の片股を指差して、二拾銭と云つて買つた。日本の軍票で二拾銭出すと、鶏屋の親爺は良い良い（ハオハオ）と云つて、にこにこ笑つて取つてくれる」と記されている。一〇月一日の記述には、戦線から戻ってきた芙美子をアマが喜んで迎えてくれる様子が、一〇月三日の記述には、アマの子供が芙美子になつき、芙美子の膝の上に乗っては中国語を教え、お風呂まで覗きにくる様子が語られている。「子供は可愛くていゝ」、そう芙美子は書き記す。一〇月五日の記述には、南京の宿舎の近くで芙美子が葬式に出会った様子が記されている。門番の子供を背負ってその家の中に入ってみると、七、八歳の子供と婆さんが泣いている。その様子を見た芙美子は、「軍票の五拾銭を、泣いてゐる子供に握らせてやる」と、「お婆さんは何か早口に喋りながら」「多謝多謝と云つて立って来た」。いずれも、芙美子が一〇カ月前、出会っているのと同じ南京の庶民についての記述である。戦場での芙美子の態度も同じである。漢口入城直前の一〇月二五日の記述には、芙美子が避難してきた中国人の子供を抱きかかえるエピソードが記されている。「私は一人の赤ん坊を抱いてみた。むくむくした埃臭いものを着てゐたけれど、ぐにやぐにやしてゐて何とも云へず可愛かつた」、「私は初（はじめ）の赤ん坊を抱いたまゝ、中庭に出て馬や兵隊を赤ん坊にみせてやつた。赤ん坊は汚れた手を時々私の頬へ持つてきたりしてゐる」という言葉がそれである。

一〇カ月前、南京を訪れた芙美子は、「纏足してひよろひよろ歩いてゐるお婆さん」や「敬礼をしてゆく子供」を見て、「いいきびだ」と書き記していた。しかし、『北岸部隊』には敵意や蔑むような態度は一切、伺われない。中国の庶民たちとの心の交流の風景が、微笑ましいエピソードとともに繰り返し語られている。

ただ興味深いのは、その一方で、芙美子は国民党政府に対しては、一貫して敵意をはっきりと書き記していることである。たとえば、『私の昆蟲記』には「支那はどうしてこんなに声高く『抗日』をしなければならないのか不思議です。支那婦人が必死になつて、抗日大会なんかしてゐる写真なんかみますと全く一犬虚を吠ゆれば の言葉をおもひ出します」、「西洋人が来て、平気で支那人侮蔑をやってゐることにはてんとして何も云はないのだから、抗日主義も小児病的なところが大半あるやうな気がして仕方がない」と記されている。民族自決や民族ナショナリズムを政治信条とするような、国民党政府を支持する中国国民に対する不信感、敵愾心を顕わにし、視野が狭いと責め立てる芙美子の姿がここにはある。

そして、『北岸部隊』や『戦線』においても当然、芙美子は国民党政府に対しては敵意むきだしのままなのだが、ただ、批判の矛先が国民党を支持する中国国民ではなく、国民党そのもの、蔣介石や国民党

兵士に向かっている点で、若干の「ずれ」が生じていることも見逃すことができない。『戦線』一〇信で芙美子は、るいるいと横たわっている国民党軍兵士の死体を見て、「蔣介石はこんなに沢山の犠牲を払つても、なほかつ、超然としてゐられるのかしら?」と怒りを感じる芙美子の様子が記されている。この言葉を聞いたある記者が、「自分だけの財産と、自分だけの兵隊をしつかり持つてゐる蔣介石は、こんな犠牲位は何でもないでせう」と答えたと、芙美子は書き記している。『北岸部隊』一〇月二二日には、戦線を行く途中、芙美子が国民党軍兵士の死体が畑の中や丘の上に転々と転がっている風景を目撃するエピソードが紹介されいてる。担架に乗せられていった日本兵に対しては「沁み入るやうな感傷や崇拝の念」を持っていたはずなのに、国民党兵士の死体は「一つの物体」にしか見えず、「冷酷なよそよそしさ」しか感じられない。このような自分の内面風景を顧みて芙美子は、「民族意識としては、これはもう、前世から混合する事もどうも出来ない敵対なのだ」と感想を述べる。

これまでの考察を整理すると、(1) 南京攻略戦時における芙美子は、国民党政府だけでなく中国の民衆に対しても敵意も抱いており、もう一方で好意的な発言を記していることを勘案しても、その態度はアンビバレンツなものとなっている、(2) 漢口攻略戦時においては、『私の昆蟲記』に記されたような中国民衆に対する悪意ある発言は一切、姿を消し、友好的な言葉だけが繰り返し記されるようになる、(3) その一方で、蔣介石や国民党兵士に対しては敵意を露骨に示しており、芙美子の対中国認識は南京攻略戦従軍時と比べて、いわばダブル・スタンダードと化してしまっている。以上のようにまとめることができるだろう。

そこで、このような芙美子の変化をどのように理解すべきかという問題が浮上してくるわけだが、芙美子自身の内面の問題はひとまず措くとして、今日から見た場合、漢口攻略戦直前、戦争報道に関して、政府や軍部によって明確な方針がうち立てられることになった事実に行き当たる。

ドイツ駐日大使トラウマンによる和平交渉が進展を見ず、芙美子が南京から去った直後にあたる昭和一三年一月一六日、第一次近衛内閣は「帝国政府ハ爾後国民政府ヲ対手トセス　帝国ト真ニ提携スルニ足ル新興支那政権ヲ期待シ是ト両国国交ヲ調整シテ更正新支那ノ建設ニ協力セントス」という、有名な国民党政府相手にせずの政府声明を行うことになる。以後、軍部、この場合は陸軍の対支謀略計画は、この方針に沿ったものとなる。端的に言えば、蔣介石の下野と国民党の解散を促すための宣伝工作を行うことが根本方針としてうち立てられることになる。たとえば、昭和一三年八月四日、中支那派遣軍司令部の名で発せられた「伊作戦ニ伴フ宣伝工作」には、漢口の政治的軍事的価値を強調して、その陥落に関連して、蔣政権は一地方政権に転落し、今後は自滅の他、道はないことを海外に宣伝するよう指示されている。また、国内に対する宣伝としては、国民の志気を維持するために長期戦の覚悟を促すこと、戦場における日本軍兵士の労苦をなるべく詳細に伝え、国民の奮起を促すこと、国民党軍の素質低下、蔣介石政権の動揺を誇大に宣伝して国民の志気を弛緩させないよう気をつけること、

などが指示されている。

また、七月二九日、中支那派遣軍の名で発せられている「謀略宣伝要項」では、冒頭においてまず、「謀略宣伝ノ目的ハ支那民衆及軍隊ノ反戦、反共、反蒋機運ヲ醞醸激化シ敵軍戦意ノ喪失ト漢口政権分裂崩潰ヲ助長セシムルニ在リ」、「本宣伝ハ漢口攻略直前其効果ヲ挙クルヲ目途トシテ実施スルモノトス」と、対中国宣伝の目的とその時期が語られる。その上で、中国民衆の窮乏状態、国民党軍による民衆被害の実態、中国民衆の反戦要求、蒋介石の赤化、「蒋一族カ国民ヲ欺瞞シ戦争遂行ノ為ト称シテ益々搾取シツツアルノ実情」各地の反蒋機運の激化、などなどを宣伝するよう、指示されている。(11)

当然と言えば当然であるが、改めて確認しておきたいのは、ペン部隊の陸軍班に属して従軍する芙美子もまた、このような方針の中にある、という事実である。細々した例証はもはや必要ないと思うが、『戦線』も『北岸部隊』も政府および陸軍の宣伝工作の方針に沿ったものになっていることは言うまでもない。それが本心なのか、何らかの理由でいやいや戦争協力の筆を執っているかは今は問わない。ここで確認したいのは、今日から見た歴史的事実である。「長い間、困苦欠乏に耐へて来た兵士に向つては、どんな大げさな自慢話でもかまはないと思へる」(『北岸部隊』一〇月二四日)と戦地での兵士の苦労を記し、「どんなにこの戦ひが激しく、そして長く続かうとも、一つの区切りがつくまでは、将来の見通しがつくまでは、この戦ひはやめられないものだ」(同上)という兵士の言葉を紹介し、国民の志気の弛緩をいさめ、さらには、私欲にとらわれ民衆に犠牲を強いる蒋介石のイメージを書き記す芙美子の従軍記は、日本政府や陸軍の宣伝方針ときわめて近い位置にある。少なくとも、政府や軍によるプロパガンタが芙美子の従軍記にも流入している。

とするならば、南京攻略戦から漢口攻略戦までの間に芙美子の中国民衆に対する態度が変化したのも、政府の対中国政策の変更、それにともなう宣伝工作方針の策定と何らかの関わりがあったとしても、決して不自然ではない。近衛声明が行われる前の時点において、日本政府はまだ国民党政府を相手にしている。言い換えれば、国民党政府は中国民衆の総意を表象している。声明以降、日本政府は宣伝工作を通じて、中国民衆と国民党政府との分離を画策しはじめる。そして、内閣情報部によるペン部隊の結成も、芙美子の従軍もまた、そのような流れの中にある。巨視的に眺めれば、以上のような状況の下で、『戦線』や『北岸部隊』は成立している。言い換えるならば、中国民衆との交友を暖める芙美子のエピソードを、同時代の政治的な文脈で読めば、日本と中国民衆の近しさ、逆から言えば、国民党政府と中国民衆との距離感を暗喩してしまうことになる。政府や軍部の宣伝工作の方針に寄り添う形で執筆されている『戦線』や『北岸部隊』の性格を考えれば、漢口攻略戦に従軍した芙美子が、中国の民衆に対してきわめて友好的な姿勢を示しているのも、以上のような経緯の中でもたらされた変化であった可能性は否定できない。また、たとえ、これまでもしばしば指摘されてきたように、本来、芙美子が庶民を愛する、庶民に密着した作家であったとしても、彼女の主観的善意を離れて客観的に見れば、『北岸部隊』で見せる芙美子の庶民志向が、政府や軍部の

宣伝方針とはまったく無縁な場所に位置している、と言い切ることはやはり難しい。

都市漂流民の行方

さて、ここまでの考察では芙美子の内面に踏み込むことを避け、彼女の従軍記が置かれている政治的、歴史的状況との関わりの中で、その性格を明らかにしてきたわけだが、最後に、芙美子の側から、つまり作家主体の内面世界に沿った形で、再度、『戦線』や『北岸部隊』について考えてみたい。

先に紹介したエピソードと内容的にやや重なるのだが、芙美子の内面のドラマという視点から、『北岸部隊』を読んでみた場合、第三者として批評的に日本の兵士を賛美するのではなく、芙美子自身の実体験として、兵士たちのやさしい人柄に触れたエピソードが、従軍記には繰り返し挿入されている事実に気がつく。兵隊たちが芙美子に思いやりをもって接するたびに、彼女は、その倫理的で無欲な人柄に感銘を覚え、感謝の言葉を書き記している。たとえば、「顔馴染になつた兵隊さんが、『林さん、たまには休んでいらつしやい、御飯を焚くのだつたら焚いてあげますよ』と、馬の腹の下からのぞいて、飯盒を下げてゐる私にこんなことを云つてくれるのです。溢れる気持です」（『戦線』一〇信）、「さアさアどうぞ乗つて下さいと、親切に私をかゝへあげて、ヅツクを張つた車両の弾薬箱の上に私を乗せてくれた」（『北岸部隊』一〇月一九日）などがそれである。他にも、兵隊から焼き芋を貰い、鶏卵を貰い、キャラメルを貰い、氷砂糖を貰い、煙草を貰い、その都度、芙美子は、兵隊の優しさや人格美を賞賛し、感謝の言葉を書き記している。

一瞬、芙美子が兵隊に「男」を意識するようなエピソードすらある。「私が女性であると云ふことについて、私は、実にこの戦線でおもひがけない一瞬にめぐりあひました」という一文で始まるこのエピソードは『戦線』一六信に記されている。従軍中、芙美子が堤を登って川岸に降りようとした時、一人の兵士が、黙って両手を差し出す。崖を降りるまでの間、芙美子は「息がとまりさうに固くその兵隊にかゝへられ」ることになったのだが、その時の気持ちを芙美子は「ほんの短い一瞬でしたが、何と云ふこともなく、私は胸苦しいものを感じました」と書き記している。やさしさや同胞愛、義務感、克己心などの崇高な人格美だけでなく、あるいはその向こう側に、一人の女として、兵士を意識する芙美子の心象風景がここには書き込まれている。

そして、興味深いのは、そのような芙美子が、内地に帰った後の自分の人生を思いやっては、不安感や焦燥感に捕らわれていることである。端的に言えば、芙美子は兵隊とともにある従軍中の日々に精神的な充足感と安堵感を感じており、帰国後の自分の姿を想像しては、そこに虚無と不安と絶望が広がる忌避すべき日常を意識している。「正直を云ひますと、私は、内地へ戻つてからの生活の方に何となく不安を持つやうになつたのですが、どうした事でせう……」（『戦線』七信）、などがそれである。日常に戻っていくことに対する芙美子の不安感、恐怖感は、漢口に近づくにつれますます深刻なものになっていく。な

ぜなら、漢口に到着する、ということは、内地に帰還する日が近づいていることを意味するからである。漢口入城の時の心境を、芙美子は『北岸部隊』一〇月二七日で、「こゝまで来てみれば、私は段々内地の現実が近くなつたやうな気持になり、再び苦しい生活と、苦しい世間のつきあひが、私を妙な不安におとして来る。戦場を歩いてゐる時は、そんな不安なんか微塵もなかつた。」「帰つて行けば、何か怖いものが私を待つてゐるやうな気がしてならない」と書き記している。

普通に考えれば、恐怖を感じる、というのはむしろ戦場での心理であって、内地に帰った後の日常的な生の方に深刻な不安感を抱いている芙美子の姿というのは、常識的に考えれば奇異にすら思える。芙美子にとって恐怖の対象は生と死の境目にあるような戦地での生活よりも、日常での生活であり、そこで不可避的に課せられる「世間のつきあい」である。「最前線に出てみると、色々な個々の雑念は吹き飛んで跡かたもなく消えてしまふのだ。自我といふものが、段々雲散霧消して来るのだ」（『北岸部隊』一〇月二三日）という言葉を踏まえれば、「自我」を中心にした生活もまた、彼女が不安と恐怖を感じていた対象に加えることができるだろう。

そこで、芙美子が忌避する〈日常〉、内地で待つ「生活」、「世間のつきあい」、「自我」について、『放浪記』を手がかりに考えてみると、その〈日常〉とは、たとえば、「万人の万人による闘争状態」といったような、他者との緊張関係を不可避的に強いられる都市生活者の生存様式であったことに思い至る。そして、そのような都市生活と対比される形で彼女の目の前に現出したのが、同胞愛と人格的崇高性を体現する（少なくとも、そう芙美子が信じた）兵士たちに囲まれての従軍生活だったことが分かるのである。

『北岸部隊』や『戦線』とのコントラストを形成するようなエピソードを、少し『放浪記』から拾い出してみよう。実は、放浪記にも一カ所だけ兵隊が登場する文章が挿入されている。第三部の「近衛の騎兵隊が、三角の旗を立てて風の中を走ってゆく。馬も食っている。騎兵の兵隊さんも食っているのだ」という言葉がそれである。「明日から、今から飢えて行く」まで追いつめられた芙美子の東京での生活は、貧窮の極みにある。騎兵の行進を目にした結果、馬よりも悲惨であるような自らの境遇を知った芙美子は、兵隊だけでなく、軍馬に対してさえルサンチマンを抱かないではいられない。

言うまでもないと思うが、『放浪記』は経済的な窮乏の中にあって、死への誘惑と生への意志の狭間で揺れる都市生活者、芙美子の内面風景がなまなましく描かれている。「いっそ、銀座あたりの美しい街で、こなごなに血反吐を吐いて、華族さんの自動車にでもしかれてしまいたいと思う」、「こんな女が一人うじうじ生きているよりも、いっそ早く、真二ツになって死んでしまいたい」という言葉は、貧しさの中で何もかも嫌になり死へと傾斜していく彼女の内面風景を伝えている。ただ、もう一方で、絶対的な生への意志、道徳的に堕落しようが人の道に外れようが、とにかく生き抜くという、生活者としての生存肯定の言葉も、芙美子は書き記している。「誰かこんな体でも買ってくれるような人はいないかと思ったりした」、「ああ私の頭にはプロレタリアもブルジョアもない。たった一握りの白い握り飯が食べたいのだ」

などの文章がそれである。『放浪記』の芙美子は、いつも、死への誘惑と生への意志を両極とする振幅の中にある。

付け加えると、「たとえイエス様であらうと、お釈迦様であらうと、貧しい者は信ずるヨユウなんかないのだ。宗教なんて何だらう」という芙美子の信仰批判やマックス・スティルナーを辻潤訳で読んでいたことを考え合わせれば、芙美子の言う「自我」とは、個人的欲望の追求のため、飢えないため、金銭を得るためには道徳的堕落を辞さない態度、というくらいの意味だったことが分かる。その態度が、スティルナーの自我主義と結びつき、食欲を満たすことの前には信仰も思想もない、というイデオロギー嫌悪へと発展していくわけである。

また、個人的欲望の絶対肯定を核とする芙美子の自我主義は、『放浪記』に記された数々の男性遍歴の内にもその影を落としている。正確には『放浪記』に描かれた芙美子の前に現れる男達はいつも〈自我主義者〉として彼女の前に立ち現れるのだ。たとえば、女学校時代から恋愛関係にあり、ともに尾道から東京に上京し、同棲生活を始めた青年が、芙美子を捨てて一人で故郷に帰るエピソードが、『放浪記』には紹介されている。「家を出てでも私と一緒になる」と言っておいて「アメリカから帰って来た姉さん夫婦がとてもガンコで反対する」と、いいかげんな音信しか寄こさない男の手紙に悔し涙を流しながら、妊娠していた芙美子は、雑司ヶ谷の墓地で何度も墓石に腹をぶつける。俳優、田辺若男との同棲生活を記した下りには、お金がなくなるから別れようと芙美子に告げながら、田辺の鞄の中には大金が隠してあったエピソード、別居後、洗濯物を届けに田辺の下宿に行ってみたら「桃割れに結ったあの女優とたった二人で、魚の様にもつれあっている」姿を見てしまい、目にいっぱい涙をため、全身が固くこわばってしまったエピソードが紹介されている。詩人、野村吉哉との生活を記した下りでは、「私は足蹴にされ、台所の揚げ板のなかに押しこめられた時は、このひとは本当に私を殺すのではないかと思つた。私は子供のように声をあげて泣いた。何度も蹴られて痛いと云う事よりも、思いやりのない男の心が憎かった」と書き記している。そして、荒みきった二人の生活の原因は、「貧乏をすると云う事が」「私達の心身を食い荒し」てしまったところにあった。

「一抹の死愁が、潮のやうに時々、私の胸に塩つぱく寄せて来る。人間の生活に苦悶する私の苦悩は、内地へ戻ってから痛烈に始まるのだ」と、内地での生活を思いやっては死への誘惑に駆られる芙美子の心象風景が、『北岸部隊』一〇月二四日には書き込まれている。この文章で言う「死愁」とは、おそらく、『放浪記』で繰り返し語られた死への傾斜と繋がっている。日本に戻れば、エゴとエゴが無限の闘争を繰り返すような他者との緊張関係が彼女を待ち受けている。そこにあるのは、傷心、孤立、堕落、欲望、猜疑心の渦巻く、都市生活者としての生存である。図式的に言えば、芙美子は内地での生活にゲゼルシャフト的な緊張関係を感じており、中国の奥地で兵士とともに行軍する今の状況にゲマインシャフト的な「想像の共同体」（ベネディクト・アンダーソン）を感じている。「戦線では将校も兵隊もまるで一家族のやうです。広い戦線に来てみますと、私は束縛される何ものもない悠々たるものすら感じられました」（『戦線』三信）と書き留めた芙

美子は、戦地においてむしろ解放感と情緒的な一体感を感じている。彼女が解放されたのは、国家や社会制度の束縛からではない。下層階級の都市生活者として生きてきた彼女が人生の途上で舐めたさまざまな辛酸な経験、その過程で負った深刻な心傷からの解放を彼女は喜んでいる。『放浪記』から『北岸部隊』に眼を転じた時、そこに浮かび上がるのは、「私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない」と記した彼女が、中国奥地の戦場で、「日本」という「想像の共同体」の中に、一時的であるとはいえ、自分の居場所を発見するドラマである。「矢原隊の階下の部隊では、夕方、湖へ行ってわざわざ私の為に野花をとって来たのだと云って、私の前の卓上に黄色い花が飾ってあった」（『北岸部隊』一〇月一六日）と書き記す芙美子が噛みしめている幸福感とは、都市の下層民として生きてきた彼女が余儀なくされた他者との緊張関係からの解放感であり、他人の好意を好意として素直に受けとめても決して傷つくことはないという、兵士に寄せる全幅の信頼感や一体感覚である。

翻ってみるに、そのような幸福感、あるいは解放感、高揚感の中にある芙美子が兵隊賛美の筆を執ったとしても、当然と言えば当然である、と言ってよいかもしれない。芙美子の主観に即して言えば、彼女の主眼は、戦争を肯定し賞賛するところにあったのではなく、戦場の兵士たちが見せる友愛の情に接した喜びを表現するところにあった。逆から言えば、だからこそ芙美子のナショナリズムにあっては、天皇への崇拝の念でも国家への忠誠心でもなく、民族的自己同一性が前景化されることになった、とも言える。とするならば、少なくとも、戦争協力というレッテルを貼るだけでは、芙美子の従軍記の本質を言い当てたことにはならない。都市生活者として〈自我〉を生きてきた芙美子が、〈日本人としての私〉を実感し、孤立感や緊張感から救済されていく。その喜びが、一体感でつながれた周囲の朋友たち＝兵隊を賛美するための筆を執らせ、やがてその筆は、反省的思考を媒介としないまま、波紋が広がるように、宣伝協力、国民党批判へと及ぶことになる。『北岸部隊』や『戦線』を芙美子の内面に即して見た場合、このようにその本質的性格を規定することができるはずである。

注

（1）朝日新聞社　昭和一三・一二
（2）中央公論社　昭和一四・一
（3）戦争中は未発表、引用は『昭和戦争文学全集』2　集英社　昭和三九・九
（4）引用は（3）と同じ
（5）『戦史叢書　支那事変陸軍作戦2』朝雲新聞社　昭和五一・二
（6）「林芙美子のパリ旅行と戦争協力〝前夜〟」『新日本文学』二〇〇四・一一
（7）今川英子編『林芙美子　巴里の恋』　中央公論新社　二〇〇一・八
（8）第一部　改造社　昭和五・七、第二部　改造社　昭和五・一一、第三部『日本小説』昭和二二・三～昭和二三・一〇
（9）『林芙美子の昭和』新書館　平成一五・一二
（10）改造社　昭和一三・七
（11）引用は（5）と同じ